

^ 13
3205
2止



へ 13
3205
2

孝子善之丞感得傳卷下

夫より善徳の錫杖より継り連華に糸ありて空乃方へ
上座事。先小地獄下りゆまの一倍いどもよりとられた。
光りかやく金色の大山あり。虚空より向けて光ある糸。
者十篇もろく下りゆ山の中流より向き將家東に。端正
るれくありて。名く其糸に取付ゆま。糸自然と虚
空へ縮りあがる。其門より或は糸をゆる糸きれて落る者あり。
おもしろき糸を痛めて。其人を連臺に命せ。卒のふと正
たむあり。糸の仰し今糸切く落る者お。沙婆門にて念
佛をやるる。疑心なく。此生極樂をいりやうとす。

昭和九年
十月九日
購求

者。順次の修行うまひて。要婆(要)一歩(歩)也。今蓮臺(宗)を踏み歩み。あれ観音菩薩也。世人歩(歩)婆(婆)よりく(く)り(り)て(て)い(い)後(後)悪道(悪)に(に)墮(墮)る(る)事(事)あり。今生目(目)は(は)必(必)死(死)生(生)成(成)る(る)なり。

○茶の鉢杖(茶)を(を)け(け)く(く)の(の)り(り)し(し)也。間(間)も(も)く(く)極樂浄土(極樂浄土)の(の)寂滅(寂滅)此(此)門(門)に(に)到(到)る(る)也。世(世)大(大)門(門)の(の)衆(衆)を(を)茶(茶)走(走)る(る)く(く)呪文(呪文)を(を)唱(唱)へ(へ)て(て)門(門)を(を)の(の)ぼ(ぼ)り(り)同(同)者(者)あり。げ(げ)門(門)は(は)と(と)く(く)金(金)色(色)に(に)く(く)光(光)り(り)し(し)也。又(又)大(大)門(門)あり(あり)車(車)と(と)く(く)ま(ま)き(き)物(物)あり(あり)。と(と)れ(れ)より(より)き(き)り(り)け(け)ら(ら)り(り)は(は)又(又)大(大)門(門)あり(あり)寂滅(寂滅)の(の)門(門)より(より)し(し)莊嚴結構(莊嚴結構)あり(あり)事(事)遠(遠)く(く)勝(勝)ま(ま)り(り)。は(は)門(門)上(上)より(より)廣大(廣大)中(中)で(で)人(人)あ(あ)ら(ら)る(る)は(は)そ(そ)の(の)中(中)に(に)段(段)鉤(鉤)欄(欄)乃(乃)上(上)に(に)無(無)數(數)の(の)茶(茶)水(水)多(多)に(に)如(如)意(意)故(故)持(持)し(し)け(け)る(る)か(か)は(は)安(安)樂(樂)の(の)方(方)に(に)入(入)る(る)なり。

かり待(待)つ(つ)縁(縁)起(起)る(る)待(待)也。并(并)此(此)作(作)る(る)あ(あ)れ(れ)の(の)時(時)先(先)を(を)と(と)り(り)て(て)死(死)生(生)法(法)を(を)考(考)へ(へ)る(る)衆(衆)あり(あり)。今(今)圖(圖)浮(浮)回(回)行(行)の(の)人(人)東(東)連(連)く(く)あ(あ)ら(ら)り(り)て(て)死(死)生(生)を(を)考(考)へ(へ)る(る)也(也)。收(收)び(び)て(て)は(は)門(門)を(を)出(出)遣(遣)之(之)後(後)大(大)なり(なり)と(と)か(か)く(く)て(て)後(後)に(に)阿(阿)彌(彌)陀(陀)如(如)來(來)巍(巍)然(然)と(と)して(して)無(無)量(量)の(の)不(不)衆(衆)女(女)圍(圍)繞(繞)せ(せ)り(り)。慈(慈)幢(幢)勝(勝)蓋(蓋)を(を)は(は)し(し)る(る)が(が)い(い)妙(妙)の(の)音(音)樂(樂)奏(奏)し(し)観(観)音(音)菩(菩)薩(薩)蓮(蓮)臺(臺)に(に)坐(坐)す(す)る(る)を(を)考(考)へ(へ)る(る)衆(衆)あり(あり)。その(の)新(新)生(生)人(人)の(の)姿(姿)三(三)歳(歳)か(か)ら(ら)り(り)の(の)幼(幼)児(児)の(の)如(如)く(く)。た(た)ゞ(ゞ)水(水)精(精)の(の)如(如)く(く)。因(因)に(に)か(か)す(す)死(死)と(と)復(復)し(し)ら(ら)る(る)ある(る)所(所)なり(なり)。を(を)合(合)を(を)観(観)音(音)の(の)法(法)方(方)に(に)向(向)い(い)て(て)如(如)き(き)法(法)づ(づ)き(き)を(を)ま(ま)げ(げ)る(る)なり(なり)。并(并)も(も)此(此)の(の)如(如)く(く)い(い)ふ(ふ)と(と)し(し)て(て)神(神)母(母)の(の)乳(乳)香(香)な(な)る(る)所(所)に(に)異(異)なり(なり)。次(次)に(に)大(大)門(門)を(を)へ(へ)り(り)接(接)乃(乃)出(出)す(す)を(を)わ(わ)い(い)殊(殊)の外(外)卑(卑)く(く)し(し)。待(待)ら(ら)ず(ず)け(け)て(て)死(死)生(生)法(法)を(を)



后
行
作

の衆衆歡喜踊躍して持後了如意して門乃鉤欄を推き
踏み。其音いと妙なる聲にゆえし。そ終より無数の芥如
來法圍繞し幡蓋をばり帝列をりて東門より入踏み。
其路のを執りて入踏み。或は淨土より出踏み來迎のを
もあり。又他方より淨土より入踏み。淨土より衆しありて
東門の色は從來絡繹として盛なる市の志とし。衆衆乃
多少ハ或ハ千。或ハ万。十。二十。その數差降ぬれも。往生人の姿
いづれも同じく。觀音は蓮臺に坐せり。いつも來迎乃を
先をいづるやうに早く。引接の芥ハいと靜なり
○悲下て菩薩の也安ハ髮長して後よりぬれ着る衣の

いと黄しき波而重なりも著強し。下海ぐまるとぐまると
と取りてくる。その外七寶の璣珞金銀珠玉也身を飾る。
璣正珠ある事いとくまら。其中に十人の内三人ハ比丘
の芥も清しくあり

○芥に隨いて第三の門に入れば淨土乃穽廣大なる色に
て數千万里も張りて地の平らなる事大海の如く。光明
四方にくまら地の色琉璃にして金輪際すぞすれと取りて也。
庭ハ或ハ炎し花。或ハ雲樂器などの類。自然と花
やぐら穽もくまら。赤き雲の通る所の地も隨く赤く
なり。白き雲とをる所の地乃色も白く。其物も隨て地乃

色を高くに爰む。つがふ此彩も地の色まぐらうなり。或は
宮殿も飾りて。教くにもくたり

○又金銀と炎にて造りたる宮殿樓閣あり。たのく
璽路華鬘寶鐸をとりけり。微風ゆもむらも吹まれり。
くまも響きつら。その殿閣地上に立ちもあり。虚空より傳る
もあり。或は中ぐらに立ちもあり。或は空中に飛むらも
あり。其宮殿乃敢多くい五重七重の宝塔をみるも似たり。そ
の階釣欄をとり。珠玉城心く莊嚴せる事言語も述べし。
或は地上より虚空までも宮殿殿と連なり。立ちもあり。
其一は宮殿の中に。おのく弥陀觀音勢至と名をけり

いすして。鏡法し給ふもあり。或は音楽を奏し。或は法の
飲食を備へ遊戯逍遙乃ありあり。具も述べし

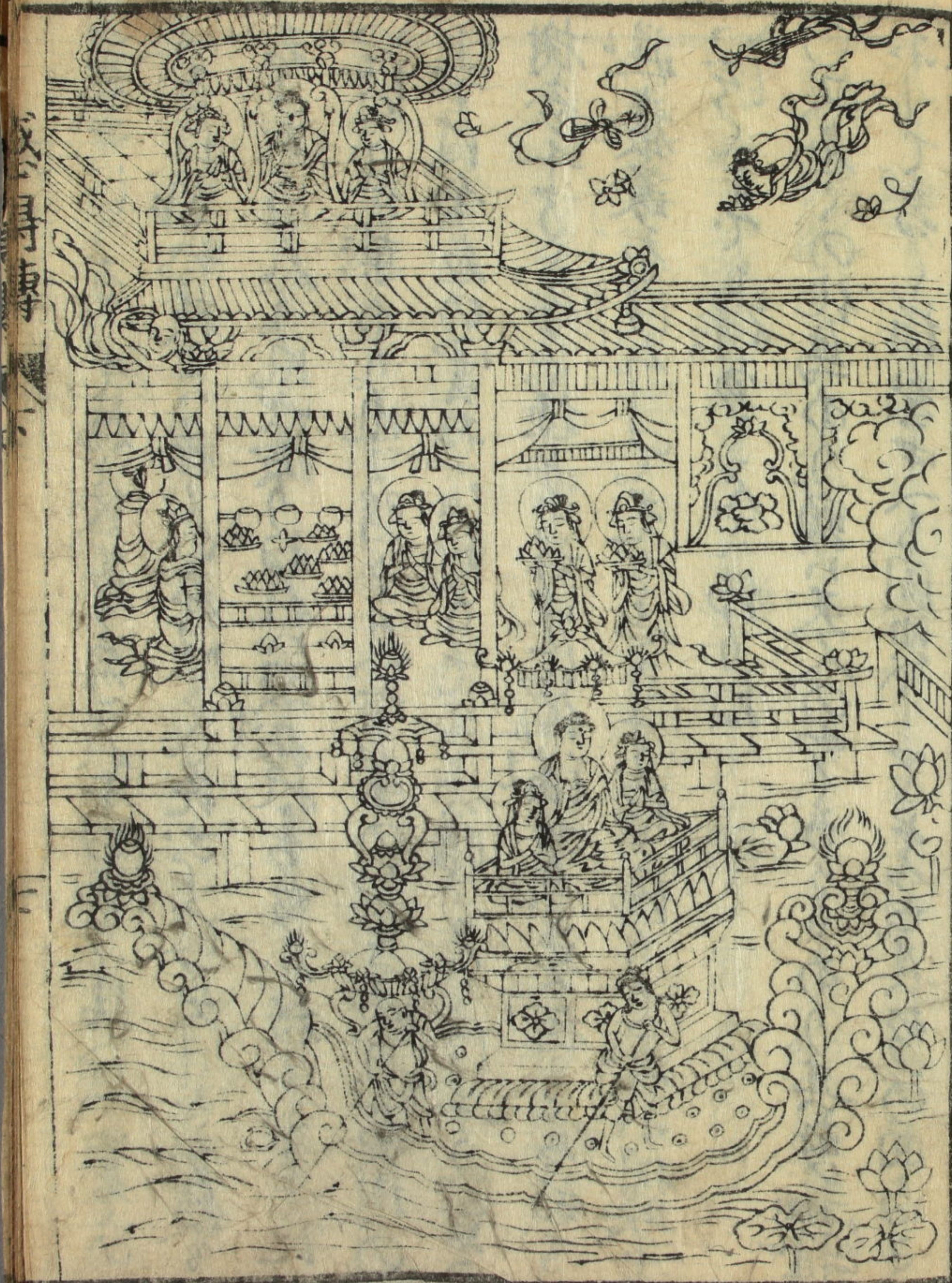
○或は無教の并。宮殿よふ系下て虚空を飛行し。或は宮
殿を先に立ちぬ。五色に雲にのりて徘徊し。給ふもあり。又
室中に下りて宮殿あり。其内より井あり。て坐禪し給ふ
もなり

○瑠璃地乃上より。金銀水晶をとり。魚鱗の如く
敷るも有り。その間より紫系の色。細く柔き如く
あまよひつら。此炎しき花降る。古き花は消く。露を
あびつら。あまよひしき花降るなり。道は金銀の繩をい

と。蝶網の如く糸を分てり。糸の厚みは踏くごとくして
 蓮華よりたらしむる如く也。二足ありしは柔にてくち
 の事四五寸なり。その糸もきこもゆるくもたけし。足を
 わがむとの地すくまればくにもゆる。二足ありしはくちあり
 一間程の間。おそろふ異香もあつての甚し。二足ありは
 さいばくたあへてあつては香もあつて。井宮の地すくち地を十
 足もあつてあつて。蝶網の糸もきこもゆるくもたけし。見聞せし
 るは皆あつて。別引あげ給ふなり。其の意面白さ
 の能く。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 聞きよとよし給ふなり。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。

海り。人おもしろい。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 て極楽。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 つつ。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 の差別もあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 をあつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。

○又あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 の網もあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 凡そあつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 法のあつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。
 へ伴。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。あつてあつて。



寶華はくちりて栴伽。香を名をわたりて。花は。香の
 妙なる。枝は。色くの花咲く。花おとに。受く。枝は。
 花をばらぬ。風吹流りぬれぬ。微妙なる。枝は。花に
 つたり。葉あり。風は。又音楽のひびきあり。葉樹の
 上は。金色の雲おとに。其上の。花は。葉樹の
 樹香。千方とあり。極楽界中に。遍満なり。葉樹も。宮殿も
 莊嚴を。法く。て。光る。葉樹も。宮殿も。互に。相映。
 い法く。までも。得あり。て。なりぬ。

○又。色く。の。化鳥あり。頭は。天人の。くちり。あり。其。姿。和雅
 あり。て。極楽中。も。同く。なり。其。姿。の。面白さ。

言は。述ぶ。べ。あり。い。遊。時。も。あり。孔雀。鴛鴦。も。其。
 羽。金銀。珠。玉。に。く。あり。羽。乃。間。より。微妙。の。法。音。吹。
 け。り。又。教。ある。花。を。葉。樹。に。翔。り。舞。も。あり。

○又。大。なる。池。あり。廣。く。て。遠。際。なし。池。の。汀。今。銀。七。葉。を。
 も。つ。く。莊。嚴。せ。り。池。中。に。青。黄。赤。白。種。の。蓮。花。咲。み。ど。
 れ。り。を。の。く。の。色。は。随。く。又。其。光。あり。其。中。花。は。上。中。下。
 の。品。つ。つ。た。り。上。品。乃。花。は。白。色。に。て。往。二。里。程。よ。ん。て。り。
 中。品。の。花。は。紫。色。に。て。上。品。花。より。少。く。小。ち。り。下。品。の
 花。は。大。方。つ。つ。た。り。其。中。神。姿。も。身。相。光。明。も。上。
 品。中。品。より。勝。き。中。品。の。下。品。より。も。殊。不。勝。き。て。ん。じ。

下界の花はなやせたりともあり。枯るのみならずも。其の作は。娑婆にて修業極まれば。念佛相續する者の蓮花の肥くも。ちて色鮮也。或は信心篤固して念佛たると。ぬれ。花よりけ。表(或は枯る也。汝も。先は衆人取對する空軍の系に。池乃蓮花の系なり。誰れも信心堅固に念佛相續して。花乃肥育長やう。みな。きあり也。

○炎池のふもとに一人の華あり。宛轉するげき。悶え。臨み。其前へ弥陀如来觀音勢至立臨り。後へ。あま。此を衆い。其の作は。あの体して。嘆き。臨み。華の初め。く。往生せし人なり。其の華は。母も。先は往生して。淨土にあり。佛為し。母は。華を

示して。其華に對面せし。り。臨み。た。わが。身。生せし。た。あり。は。母ま。ぞ。く。往生。成。遂。く。り。と。歡喜。乃。泪。を。流。し。身。其。を。記。不。る。記。を。收。び。臨。み。たり。佛の。油。の下。を。え。ん。よ。と。室。い。一。ゆ。ん。く。ば。實。も。四。十。ば。り。れ。婦。人。合。掌。して。ま。る。家。あり。け。下。して。始。と。女。人。の。姿。え。ん。く。り。其。即。に。二。向。女。人。あり。し。

○又縱廣三里。行くと。えん。ゆ。り。大。山。あり。山。は。炎。樹。あり。雜。色。の花。咲。み。たり。炎。樓。宮。殿。あり。て。其。山。は。く。り。か。こ。み。を。枝。の。華。遊。戲。道。遙。く。臨。み。有。或。は。此。山。空。中。に。飛。行。する。時。も。又。炎。池。乃。水。自。然。と。さ。る。の。り。り。て。山。に。い。り。り。或。は。宮。殿。の。り。り。又。六。樹。上。に。は。こ。ひ。て。流。る。炎。池。れ。危。し。は。持。く。乃

夏城砂として敷滿り。令穢際まです紀とをりて。白く水
を小夏北まあり。其形蓋し似たり。写勢感し之く。た
り。ろく。抄る也。

○あまし。此を衆が。の。下。品。乃。蓮。花。枯。志。を。く。る。夏。池。の
を。り。に。立。る。び。合。掌。して。頻。に。泣。き。悲。し。く。語。ふ。氣。色
た。り。并。此。佛。よ。お。の。先。に。立。語。ふ。観。音。勢。至。た。り。後。乃
并。蓮。の。先。に。佛。生。せ。る。念。佛。の。同。心。人。り。海。邊。宴。に。あ。る。同
心。信。心。も。さ。あ。念。佛。に。て。れ。ば。池。中。に。蓮。花。枯。志。を。む。む。ふ。
か。の。お。ろ。く。も。げ。さ。忠。し。く。語。ふ。り。か。く。あ。ま。し。の。雪。底
る。き。忠。し。く。語。ふ。時。に。極。樂。の。光。明。も。曇。り。は。し。も。ぬ。る

音楽のひびき。徒をこれば。り波乃音風の音までも。時止
寂然とし。唯を衆のるげ。語ふ勢の。に。其。あ。ま
れ。を。不。了。記。す。い。ち。方。れ。観。音。勢。至。志。ば。の。後。観。音
語。不。祥。也。ん。と。二。并。乃。は。口。より。霧。の。や。る。る。物。出。く。
池。中。に。枯。萎。する。花。を。く。綿。を。包。く。る。あ。ま。し。を。ま。か
ぬ。ま。に。不。思。後。や。其。花。忽。ち。い。ま。あ。る。る。色。あ。ま。し。の。後。に
此。を。名。歎。喜。踊。躍。し。語。ふ。の。喜。し。時。に。其。の。心。に。中。に
あ。ま。し。て。不。の。小。鐘。乃。勢。也。あ。ま。し。殊。勝。れ。ひ。ま。る。る。を。これ
より。樂。音。鳥。勢。の。ら。く。此。音。の。ま。ま。く。賜。わ。り。か。り。あり
あり

戒律專



后行修



○又寶池の中に金色乃瓶あまこあり。其瓶大さ二里ばかりも
 あり。やうやく。瓶乃内り宮教あやくありて。いづれも二尊の
 まして説法一臨り。觀音勢至鏡の音を。音樂依奏して
 新生の人を。さきり臨り。又次一き瓶。香花衣服を。續り
 来りて。宮教の前。並を。臨り。或ハ華鬘のやうなる
 物。持りの妙花を。今り。少く持。虚空を。飛り。来りて。
 又宮教。續り。臨り。亦の。作。これハ他方の。并。其
 て。阿弥陀如来を。供養。臨り。此并。奉。願。念。佛。を。以
 せ。餘。行。を。修。臨り。如。來。直。の。説。法。を。修。り。其。人
 の。叶。り。と。妙。觀。音。此。説。法。を。因。て。歸。臨り。念。佛。の。諸。者。ハ

真。如。隨。喜。の。説。法。を。修。り。其。色。餘。の。淨。土。ハ。障。あ。れ。ど。極
 樂。淨。土。ハ。切。障。な。し。と。ぞ。宣。い。たる。又。上。品。生。れ。并。ハ。如。來。直。の
 の。説。法。を。因。下。品。の。并。ハ。寶。池。の。波。れ。音。に。て。説。法。を。修。り。也。也。
 ○又。上。品。と。中。品。と。の。間。樂。る。草。あり。て。花。咲。ふ。不。り。し。草
 池。水。乃。波。あ。ゆ。り。流。て。志。る。り。上。る。る。葉。に。并。は。あ。ま。し。こ。ふ。
 波。ハ。障。り。多。く。あ。れ。あ。ま。し。臨り。も。あり。草。乃。根。より。金。色。玉
 敷。み。た。れ。光。四。方。に。く。や。く。照。して。波。乃。う。つ。時。ハ。衆。衆。を。集
 め。る。如。く。に。て。虚。空。ハ。海。あ。ぐ。り。其。波。の。間。ハ。色。こ。の。妙。花。と
 び。來。り。説。法。を。修。り。其。中。に。の。る。其。面。白。く。い。や。り。は
 ○又。中。品。乃。池。の。不。り。を。八。人。の。并。遊。臨り。臨り。あり。其。中。に。こ

華遊小先にまみ給ふ。只今ははく某が蓮花生せり。高
變は室を踊る五人の華。面々に筆を持し。書志願し
結ふ。華の作はあれハ大華也。要緊に念佛の功ありて
蓮花生むれ。あれを志願しとて結ふなりと

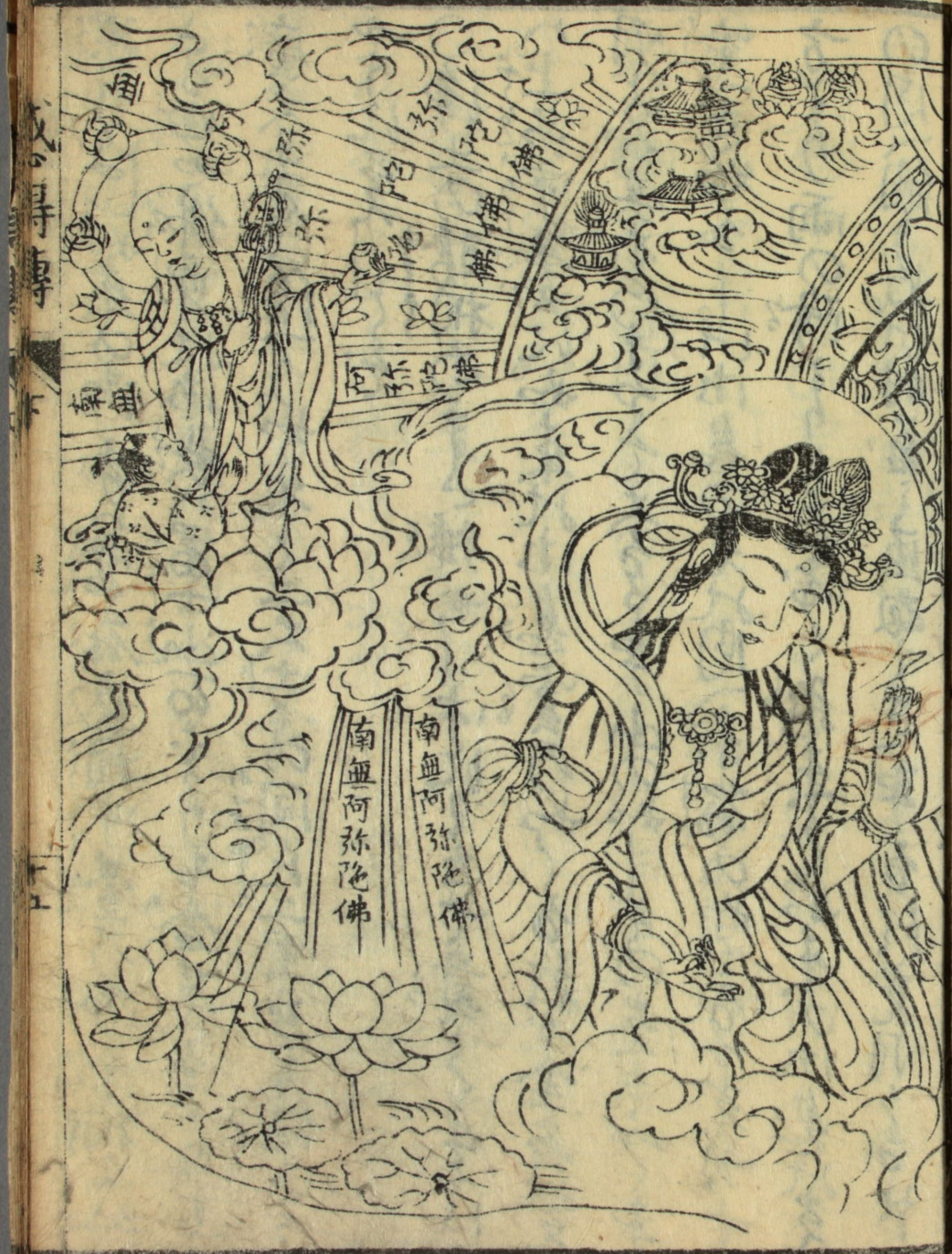
○ほふみたる蓮花の内より。光明あり。彼を勢至菩薩の
の華。俱に事り結ひて。其花より向ひて流法し結ふ。花一葉は
開たり。其一葉乃内にも教多の性生人あり。形二歳なり。乃
幼児なり。其身水晶のおとく。いとまよふ。合掌し跪き
居たり。花開きたりて。観音華を意欲し。池水を汲んと
志願す。おまゝいも。水よりくづる。お其水。おれおとくに

み舞あがりて。おまゝおとくに。其水をく。則花開新生の
頂上は灌ぎ給ふ。負回みらま。りて白毫相となる。され
より新生人通力自在にして。虚空に飛り。或は妙花を
まらりて。遍く香衆に上。教。妓樂の声。炎鳥の鳴り。
空量の伎樂。言絡は速なるなり

○中品のなり。おまゝおとくに。教十人。華啼泣し給ふあり。
長く坐間なる。おまゝ伎樂さ。いまりあきお。何の不如意事
ありて。教さあ。おまゝ。華の作。あれハ新生の香衆なり。お
まゝに。つが。身の容色微妙なる。成りて。身を。小離。て。教
喜。泣し給ふあり。又け。華地。に。地を。地を。地を。

禪のありき也。つが身虚かにみよとたりたりと我作は流る
 ○又宮殿乃内二井敷多内其其前より自然と金の鉢
 幾箇もあられ。其中に飲食みちえてり。内より其乳湯と乳
 の如くまのなりて。亦衆乃此乳の如くもなりしが流る消
 きり。亦衆も虚かに飛去流る。又上品と中品との同より石
 葛蒲もこの如くにて。紫に光ある草。その長さ千尋たり
 も有る。一。又奉に坐し流る。其上二井端坐し流る。池水
 の波よゆられて。衆も流るあり
 ○井の湯杖にもがなりなる。寶池の上は通る。上品の中
 福と見一もあなり。はるる小向ふをえられ。池乃あ

ろとに金井山をみる。おとくは空。三條立流る。井此作
 二汝流で練もなる。これ教主阿弥陀如来。観音勢
 至の二井にしくゆ。また示し流る。あまりにみよとく
 合堂に流る。衆も流る。其間安楽はる十里なり
 もる。そそきる。やうに流る。胸のあたりより。腰の
 上まではんもり。其餘は白雲うすそらん。いんぞ。金色
 此光明の如く。言流る。及ぶ。二井此も空
 も同く。令光の如く。差別も。頂光の神
 に空の如く。いんぞ。おとく。上に。金の流る。流る。と
 もなく。いんぞ。その頂光は。虚かに流る。流る。流る。



果一はし。如来の法華の尊座相中臺乃法華の相に
なる由は佛身は法華の相に在るも合せるよりも
廣大なる法なり。如来と二丈士の間に二里半も隔る
やうに云へば、

○淨土の勝相あるを辨せし中に、よき貴く是れ
へ上品の中身に、如来は法華の相に在るが、金色は光
明なる其の相なるを云ふ事、山の如し。その光りや、事
喻べき物あり。は法華の光は内へ、衆生の心へ、光明十
方より雨の降りも、志高く、如来の法華の相に在る
の内へ、細くぬけ、付着し、法華の相に在る事、光明なるは

けきべ。華雲より、汝知るは、これの光明なるは、佛命
とす物あり。汝は事法よく是れ、法華の相に在る人、法
華の相に在る。ちるる連く、法華の相に在る。不思議の十
方より、細き光の雨は、法華の相に在る。佛助法なりと
云ふ事あり。如来の法華の相に在る。又声ありて
たまげず、つくと、宣ふ。其の法華の相に在る。光明の池水をも
て、如来の法華の相に在る。貴く、法華の相に在る。佛の
法華の相に在る。念仏の法華の相に在る。念仏の法華の相に
在る。念仏の法華の相に在る。念仏の法華の相に在る。念
仏の法華の相に在る。念仏の法華の相に在る。念仏の法華
の相に在る。念仏の法華の相に在る。念仏の法華の相に在る。

ありき。是れ并、寧ろやう今花をとるて念下、後、并、皆、就
音、大、士、の、分、身、なり。あ、の、を、救、乃、蓮、花、の、皆、要、彼、に、く、一、句
を、修、念、仏、なる、者、乃、蓮、花、なり。観、音、あ、れ、志、く、如、來、の
方、よ、向、い、け、花、を、大、切、護、念、し、げ、ん、ま、仏、の、信、退、轉、あり、を
救、い、し、せ、強、と、祈、轉、し、後、なり。其、人、臨、終、乃、時、け、花
迎、い、し、あ、り、り、と、ぞ、の、さ、ま、い、る。観、音、花、故、り、は、類、し
あ、て、を、信、大、士、天、冠、乃、瓔、珞、花、よ、あ、り、て、帰、る。音、れ、た、も
し、ら、り、し、事、言、に、述、ぐ、と、り、

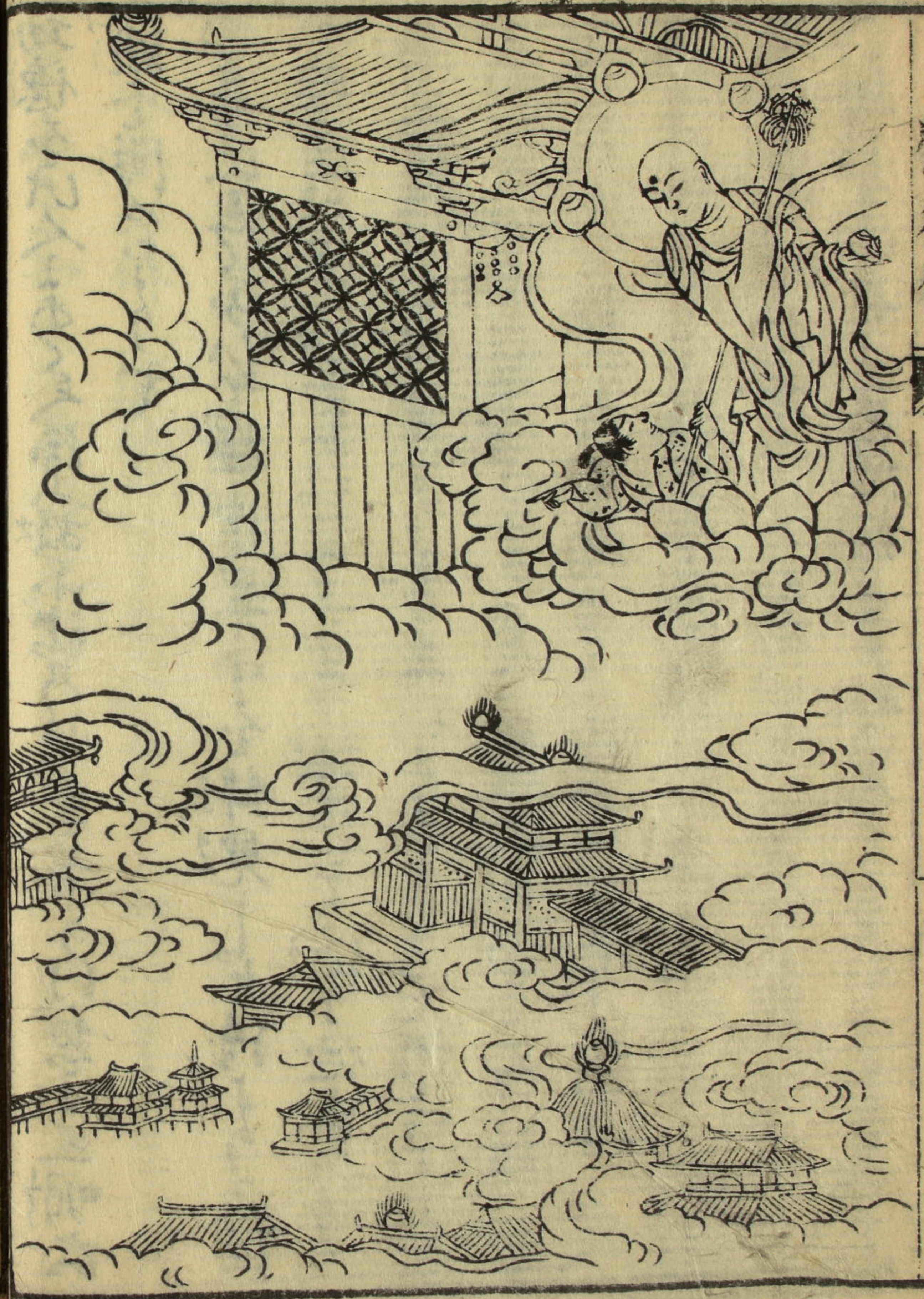
○極樂のそらを。作、ぎ、見、え、れ、ば、虚、空、一、と、い、よ、と、び、こ、れ、る。
大、蓮、花、一、輪、あ、り、て、下、れ、方、よ、向、り、赤、色、に、て、赤、光、く、ま
け、る。げ、花、中、や、ど、り、り、つ、終、る、や、う、に、ん、い、其、内、し、ひ、り、り
の、并、下、れ、方、を、た、ぶ、あ、岳、路、よ、あ、り、げ、花、時、あ、り、て、動、揺、さ、る
や、う、に、ん、い、り、

○或、不、よ、い、三、歳、が、り、け、小、兒、の、歌、を、て、色、而、く、哭、し、き、が
念、掌、し、跪、つ、き、居、る、而、救、ま、れ、并、さ、よ、げ、る、跡、よ、
菓、子、の、數、を、の、れ、持、來、り、て、其、前、よ、お、さ、其、子、の、頂、を、
撫、順、を、念、ふ、あ、い、て、汝、念、佛、し、て、ま、く、け、不、來、り、り、を、
いと、あ、い、ら、し、く、る、ち、臨、り、か、く、の、志、く、あ、ま、し、け、并、を、
來、り、後、嘆、愛、敬、し、て、る、強、い、ば、強、り、臨、り、菓、子、の、數、
幾、十、万、と、あ、く、積、並、へ、り、并、の、作、し、あ、の、結、を、衆

十方の淨土より来りて。新生の人をめぐらめ給ふありと
 ○又娑婆にて。香華を供養し。念佛を勤ぶ者の慈。
 金色の蓮花とて。虚空より降く。其花を奉
 じ。異香薫む。事甚しく。光明くやなり。教多の
 華は。花とて。蓮華次第に廣く成く。多衆を入
 る不得。華の作は。花とて。衆生を。待遠小。扱不
 まし。此人早く。往生後。遂に。おまこと。待遠小。扱不
 きたりや。

○又華の作は。娑婆にて。念仏をす。め。往生志。する者ハ。
 まこと。如来の光明。あて。され。又光明の中。此。量の
 功德を。け。く。あ。く。流。故。不。諸。乃。使。衆。を。く。け。忽。く。明。六
 通。を。得。たり。や。

○華に。志。く。あ。ひ。て。極樂界中を。拜。見。し。を。終。り。又。從
 て。極樂。東門。をか。たり。て。華。指。して。適。一。他。方。の。淨。土
 を。見。せ。給。ふ。極樂。より。方。處。い。き。る。く。て。何。處。に。教
 され。微妙。嚴。淨。の。土。也。華。の。作。は。衆。生。の。心。を。淨。く。し。る
 淨土。の。教。二百八十億。あり。極樂。乃。華。の。淨土。ハ
 於て。佛土。を。見。給。ふ。間。也。娑婆。於。千。年。を。終。る。く。の。同。也。
 とい。や。多。くの。佛土。を。見。給。ふ。不。ど。い。を。り。志。く。し。や。
 ○極樂の華。を。結。攝。る。心。の。大。さ。三。里。不。ど。も。背。き。不。



法の供養物を華鬘をふりまき。余も一信よあり。又
 同く空を飛行してお路ふもあり。其の作よまれの極
 樂の香衆。地方の法佛を供養せん為。その信なるや
 ○又極樂より。遙小下にあたりて世界あり。佛の光り照らす
 其の地も極樂の香衆より。清長もいき。萬物の莊嚴
 もおとれた。其乃作よまれの遠地あり。又なる下
 方に。南よあがりて世界あり。是にも佛の光り照らす
 其の地も長も万物乃莊嚴も。又喜地より。も次あり。
 其の地も北の地。其の地も極樂の光明の光り照らす
 とく。一。此國乃光明の地より出く。ひるも落。一。樂



器も手はくろくちをきり給ふとらん也。希の作よあは
悔慢因ありと

○ろ終より。希に陸く矢を射多おとく。うろつ下
の方下海とそくの夢もあく万勝寺村の観音堂
よありをく。日わーをふれべちさざりあり。十二日乃
我より十日此晚京まで。其間一日一夜の事あれは。
善く至公中よ。一年半程も経しやうにそんしとぞ。
あまりにをがうく存。祝者の奏若くせ出れや。まより
我病へ帰ゆ。つらもより運さそく。舟半途まで途よあゆめ。
つきでち海をいつし。何とそたをうりつらとと。為ゆ

よ付て。陸く拜見せし事ども語い。自比とらり。物つひも殊の
節に存候り。物つひやもく成し親共も自分にも不思議
み存。具に感見の事た結しに。よ若曲多大き小疑難
をたし。地獄して我を火に車に糸せさるその事。高飛
もる。偽りありとて信せざ。あまよ。悪口放言し。たり。志
のよ折し。も若曲多若菜坊業し。飛くりし。其業端向
自在とつ物よりさづられて。をのぼる。梁の上とて海あがり。
ま倒し。爐中へ落火を打消し。たり。若曲多あまのあがり
此特異候ん。く大きふおどろき。やがて表へけお。井此許
よそ垢離をとる。よ存。つらよて肉よ入。南守地。若曲多希



只今の疑心乃科をゆるさせ給へて。手紙念を。一乞い
 懺悔して。う。う。後。四。多。ふ。く。信。乞。起。し。一
 能。和。尚。右。の。次。身。を。や。上。自。身。も。日。課。三。万。遍。を。お
 交。一。折。て。酒。肉。五。辛。悖。業。を。相。止。し。母。并。に。中。源。を
 脚。も。同。下。く。日。課。一。万。五。千。教。を。授。ふ。若。四。多。ふ。よ。く
 信心堅固。一。乞。み。念。佛。せ。う。べ。い。ま。ご。半。年。も。る。こ。る
 肉。の。癩。病。お。し。ぐ。む。枝。渡。せ。り。その。ち。に。全。能。和。尚。不
 こ。と。お。化。一。端。よ。前。へ。若。四。多。も。衆。病。つ。も。一。い。
 和。尚。尊。座。の。と。と。て。毎。夜。若。四。多。事。法。人。と。傳。中。の
 ら。れ。念。佛。の。力。に。て。衆。病。お。し。お。と。く。枝。然。り。り

として。其姿をえせし。示し給ひたる。志するふに能く和尚
 示寂の後より。吾等も信を退轉し。日課も勤めず。
 肉辛糖蜜の物も破りて。現界も。ふまに病を患ふ。け
 執し。き疎さもお尋。又見くらり。山いも。公中にけ
 がふ。氣色もみく。むい。免角罪悪深重のい。よふと
 とうれ。くけり。

○吾も正。八幡宮へ丑の時系りけ。どめ。なる夜より。之を
 祈へ。毎夜系詣。二十二夜。あ。う。て。地蔵菩薩の。水引等
 にく。地獄極楽を。歴観せり。その後。い。度。く。と。能く。和尚
 の。禪室。よ。系。り。此。初。化。よ。形。り。け。和。尚。或。時。作。と。終。り。へ。





汝ハ千古にも例たとまれるる。感徳を蒙あづかりし者あれば。ついに
 八判はつぱん繁はる隆とん夜よの身みとあり。一分いっぶん念佛にふつして。極樂往ごくらくわう
 生せいを彰あきる。念ねん比ひ小示せうし一臨いつりんいなる。然しかるに和尚わうじやう
 示し寂じやく一臨いつりんいなる。野山のやまの縁ゆかりをもおろしき途とち方かたな
 き禱いたして。一あるづも。お祈いのて。食じき事じをも終おひる。年とし度ど
 ころり。仍なほく。至いた能に和尚わうじやう養やう中ちゆうに。理ことトとも。皆みなケけて。記しる。た
 折おく。示し一臨いつりんいなる。享保七年きやうほうしちねん寅とら極ごく月げつ朔しやく日にち此こゝ夜よ
 一いハハ志しれ。を裸はだかををり。一いハハ雪ゆき踏ふ分ぶんて。和尚わうじやうのの水みづ廟ぼう所しよ
 糸いと結むすち。伊い志し渡わたつと。中なかつ山やまのの足あし付つて。たがひ。涙なみだを流ながし
 て。教しやく育いく感かんトとなる。或ある夜よのの夢ゆめトと至いた能に和尚わうじやう為なり。あひ

て。汝孝行此志深切なるゆゑに我ちれを感し、地獄極楽
 を見せしも皆わがるに下り。我は是極楽上品の地藏を
 利此事無能の業記の上より具する。假し世におく。凡生海邊に生れども
 濁世の凡夫乃聖い。賦使の公らましく。念佛往生に疑
 を記す者少く。されは極く。汝は地獄極楽道
 見せしめ。その魂見の物終し。法人の信ををた
 こさしめ。海邊の幸懐を善人と見し善巧なり。海
 の勢を同しき。極楽此音楽と思ふ。衆人あつ
 まりて念佛するとき。吾は此來迎とあり。衆人
 に西方小向く。念仏する事為要なり。行位中

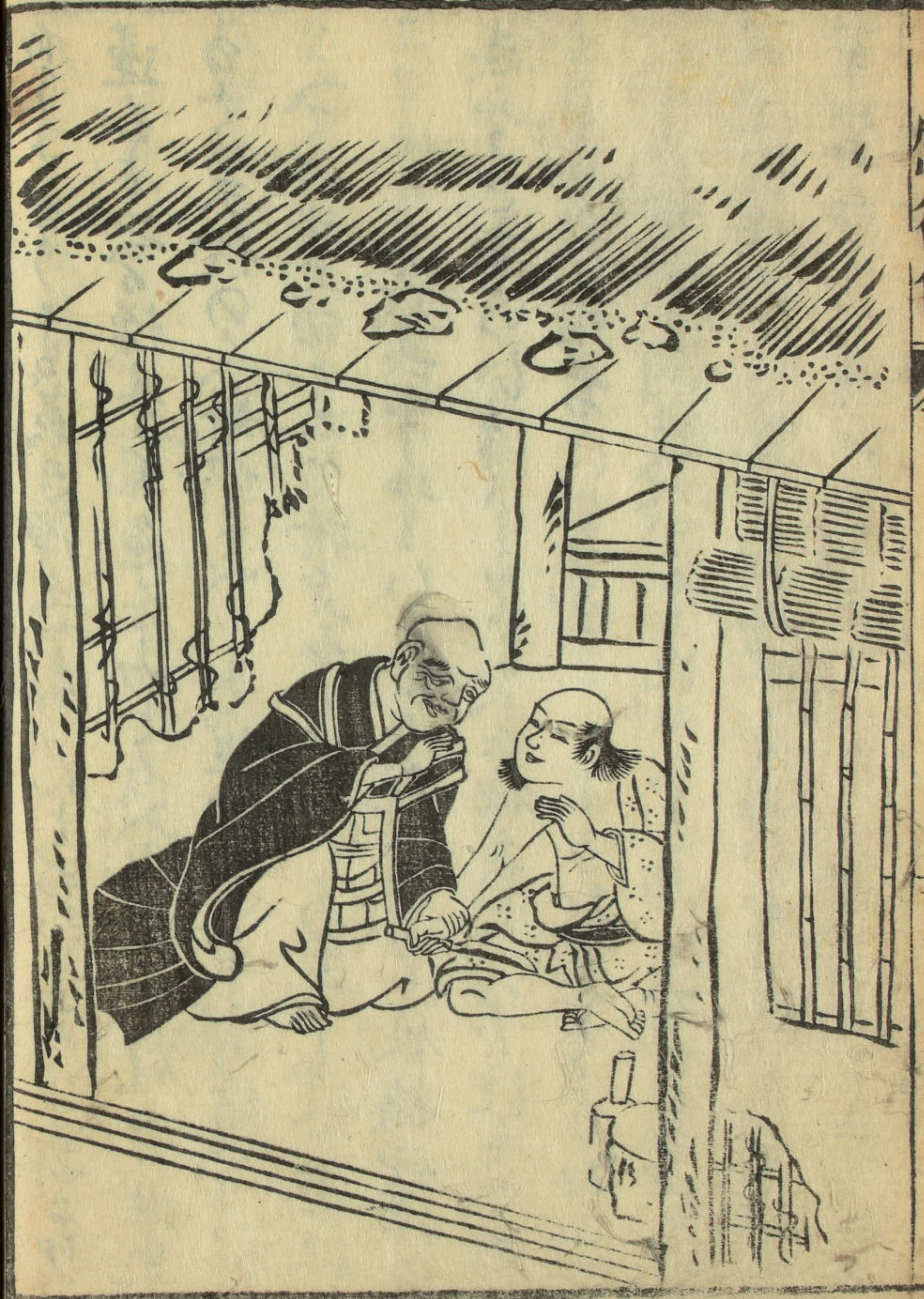


を端せむとつども。折くハ威儀をさすので。称名此教遍
依らげじべーや。教へきまなり

○前方観音堂通夜の節。んく信いー女性の本ゆら
しそ折くさいおせーが。或夜夏中に。の女性のわれ
信いて。汝信心堅固。一念佛して極樂へ来れ。彼寺を
対面とす。それハ実の女人おはあはれと。祝言は婆
とあつれ。いづりを放く。飛去給ふ。それよりこの女性
此事不通よとい絶つるも我

○極樂釋兜の後ろや。あれ経結攝る極樂へ来り
べ。くふ法間。き要婆よ還面せし事。益あり。捨

断してありとも。若き浄土へ来んと。さい定わー折すゆ。
蓮をとり信。其氣色をみとわ。入水往生。燒身生生
る。とい末代の人。軒敬まべーと。祖師もいす。わ信つり。か
まて往生大切とふら。捨身をどゆわくわふく。いと念法
よ中。ゆーら。其事ゆい。も有りぬ。又孝く厭穢飲淨の
志。やうき事い。い法くーと。念物衣類をどにも。一向
貪著を。唯常に。お嘆く。かよき氣色をよりお。い
人そのゆを同ゆ。い。多うに味をき。拍を吟ても。浄土の
莊嚴。祝音。芥の有。が。記。法。婆を。思。い。か。ゆ。を。少。婆。婆。は
幸へ。折。け。を。れ。芥。れ。法。面。新。目。よ。を。ま。れ。ゆ。い。む。と。中。け。時。



獨言ひとりごとふやいの世の人こい何が世の面白き事ありてを
よくむらや唯ただ飲食おしごづりか能と公得とくくしといふと
ほよやきりる

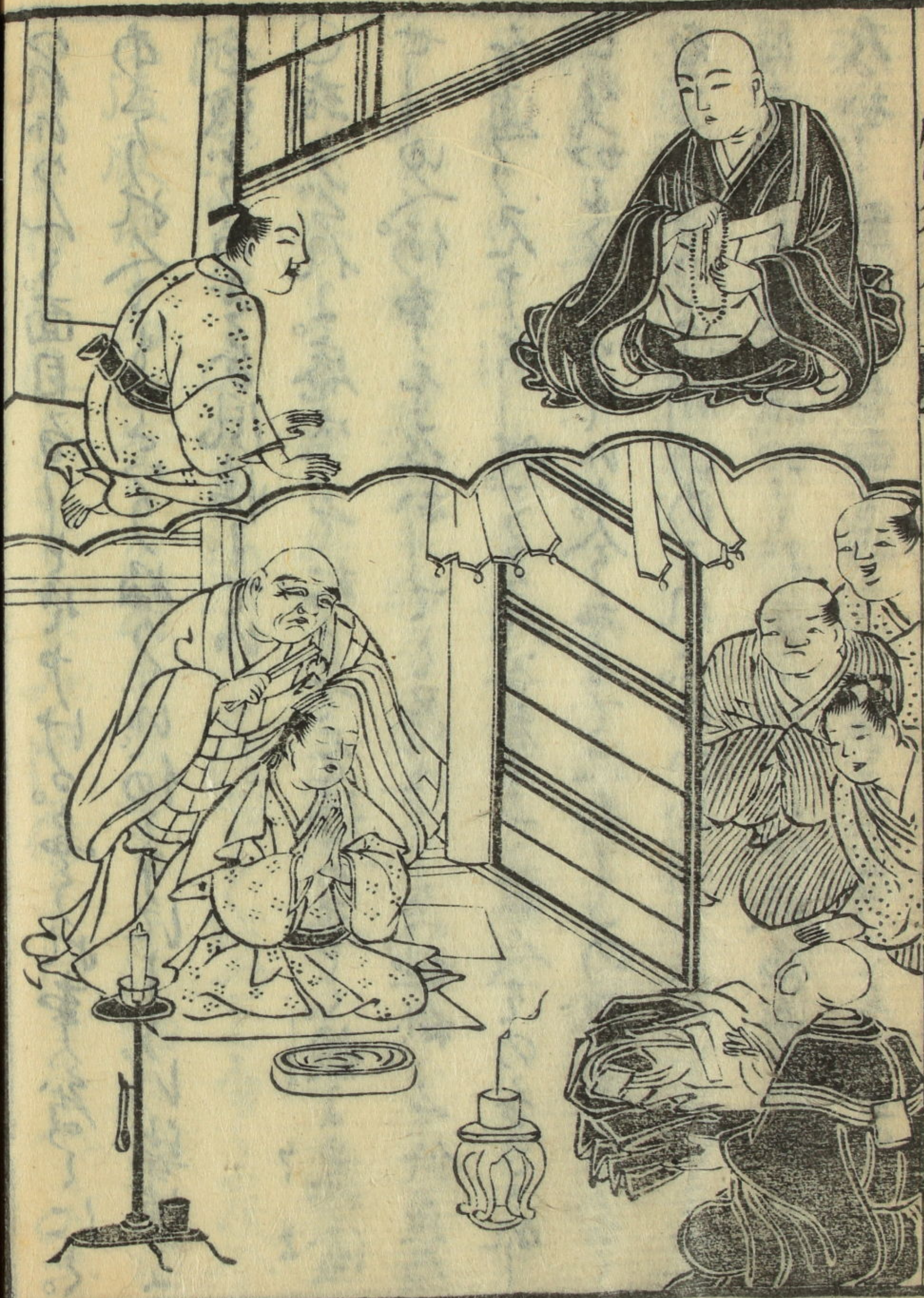
○地獄極楽感見の後、片時も早く剃髪仕度会死
まといども。親貧窮とて朝夕いとちみぬぐとをえん
捨すぐと。又また親も許ゆるしむるべし。のまにほて念佛たこ
きうばつとわつ居ゐるが。佛茶の吐若を能和尚受中うけなに
も変かりて示現して出家をすわ給いしゆわるるらに
又母また親いれ處ところ。親もあつたるる異愛の者ありて。
ほわし出家を許ゆるしむる。仍またく素折大安寺よあめく

別髪はな。は名直化と号に。お家と後いふく。不吉も過半きる波なみ。やん事たもよく固まえたり

○或時豫州安西あしの住生記乃門。極樂を繪する。不を拜見はいけん。ぬもくは宮殿みやてんのかりうるていたるがうよく似にやいとそ。ばくくき詠よみわ居ゐりしが。俄たちく大勢おほしあけてふと啼な出で。右の書物を影かげよあく。身のふして依よきり。居命いのみことらるものた。おころき蒲團ぼたんおろるて。度せふはま。小児こゝろをどののき孫まご入いらふ。おとく。つとあく。度たの。後厭うらみ求もとよ向むかひ。先まはあまう有ありた物ものを。極樂の車くるまりまれば。どうみどじまじ。信まことく。つらき人ひとの笑わら

われいりも。面目めんぼくる。と我われやける。多おほうれ事ことなうに。ああらりれ人ひとも。つらりぬく。い。何なにもに。まじ。安やす婆ばの。分ぶん成じやうど。めざま。風かぜ情じやうと。い

○或ある夕ゆふぐれ。庵室いんしつとてわりてを詠よみわ居ゐく。頻しばしばよ。落おち涙なみだせ。ゆへ。何なに事ことをなかりてと。君きみの。六む。地獄じごくとて修しゆ羅らを。通とおりえやせ。時ときを。多おほれ谷やを。と。罪人つみびとを。のるさう外がわむ。勢せいか。まうに。笑わらひ。い。が。今いまや。もして。にあま。この蚊か集あつりて。あ。勢せいさ。を。ぐ。こ。折をりの。あ。ん。さ。あ。い。お。く。思おもひ。ど。じ。と。て。月つきも。あ。う。と。啼なや。い。か。く。折をりよ。つ。れて。地獄じごく極樂ごくらくの。事ことも。な。か。し。狀じやう飲いんの。分ぶん面めんよ。あ。う。れ。い。ま。な。く。あ。り。ま。



○或受て。當麻曼陀羅を拜ませいひ。多後うつてお
 八。ぬも是程に極樂によく似たる事ありまじとて。頻々感
 涙をみぢいひ。以て交相存見よついと。あれまぞ中さるる莊
 嚴ともあひか。し。ゆわくやせし事多きゆ
 前方を神宮の作。汝定命六十二歳ありと宣ひ
 うた。極楽存見の後。片時も早く往生欲して。朝
 夕佛へも。何事壽命をちりわ給ひて。早く往生を
 させ給へと。祈念つて。少の病氣も。いふ夜往生
 かと悦やゆ。ぬと。いひ。あうれ。う。き。病。極。あり。と。生
 け。ご。よ。遂。に。本。願。あり。と。う。の。お。り。い。切。な。風。信



外にあつて。何れも佛
 かくのごとく。常に厭穢欣淨の心い。深切ありし
 バ。清いよ元文二己比也。世壽之十六の春。親
 田村乃。後室よて。教日新。念一。勇猛よ。胡時
 急佛を勤修一。二月十又日。正念。以て。此生
 の素懐。知。遂と。く。海と。素。毎。遊
 如遊

厭求中。以。相馬。興仁。南。若。よ。於。く。堂。致。和。為。け。り。わ。
 門下。の。法。長。老。尉。門。の。通。信。男。女。集。り。直。往。し。面
 談。あり。て。一。く。上。来。比。頃。中。を。聽。聞。あり。て。未。園。の。人。乃

考わ。末代も及ぶは為め也。其口説のすし具入り
 筆記も下しと余じ路も同。府下の法侍志あるに
 集りて。相共二集録も。不上来の如し。直徑中の
 へ地獄のありさる。極樂乃律相。中く沙婆婆よる
 とよき物あり。言語も及中され。らう十分も終り
 由中の直徑も拙僧も。卒するも不學愚昧の身に
 法を。ん路りん人へ。推思あるべし。虚言を以て
 加添仕るる事へ。与人推を以中するも如を
 世度記録して指おし條。虚妄を實乃儀を書加へん。
 又上下控後世誑惑の心を以て書紀し中推志

前來不修の日課念佛立處に失却し。現世にて
 佛神の尚罰を蒙り極悪乃重病を蒙り未來
 へ地獄極悪の處に落し中へく山依死くハ大恩
 教主釋迦如来西方教主弥陀善逝十方恆沙
 諸佛觀音等至地藏菩薩佛は守護法天善神
 ハ幡大善菩薩當所鎮守妙見大菩薩同奉
 大小神祇哀愍御文知見謹明し。路へ後代此
 録披見し衆中除疑生信志事も謹て推し
 如件

筆記者欣榮殿求教白

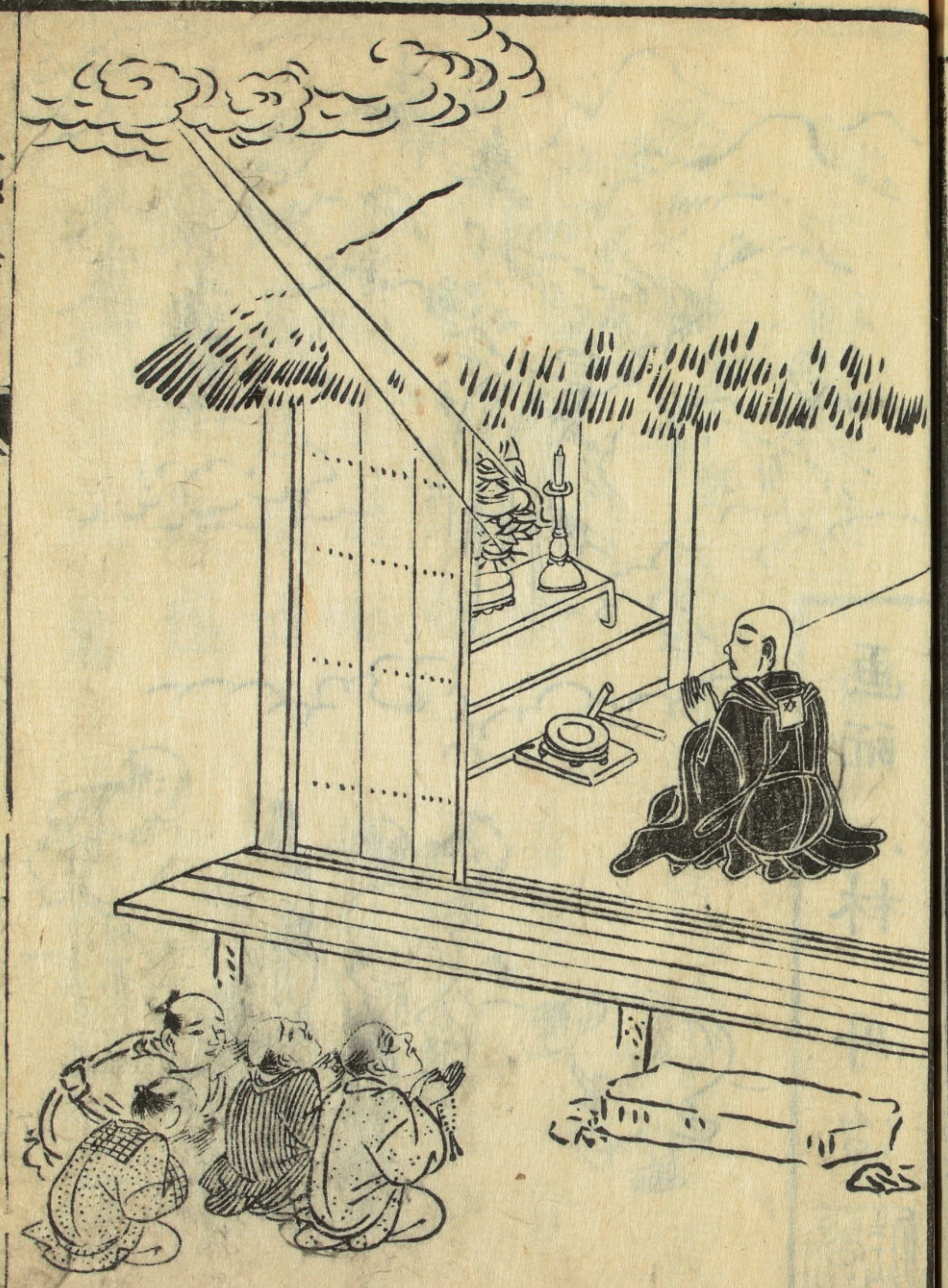
三神を奉請の間佛神に感應種々乃怪異殊々
 鏡音雲通風の爲感見志地獄の何責淨土
 如莊嚴等少も偽空言を加へ申候々
 一切弦佛菩薩地藏大士日本國中神祇冥道
 之淨界を爲り八萬地獄へ墜可申候仍誓言
 如件

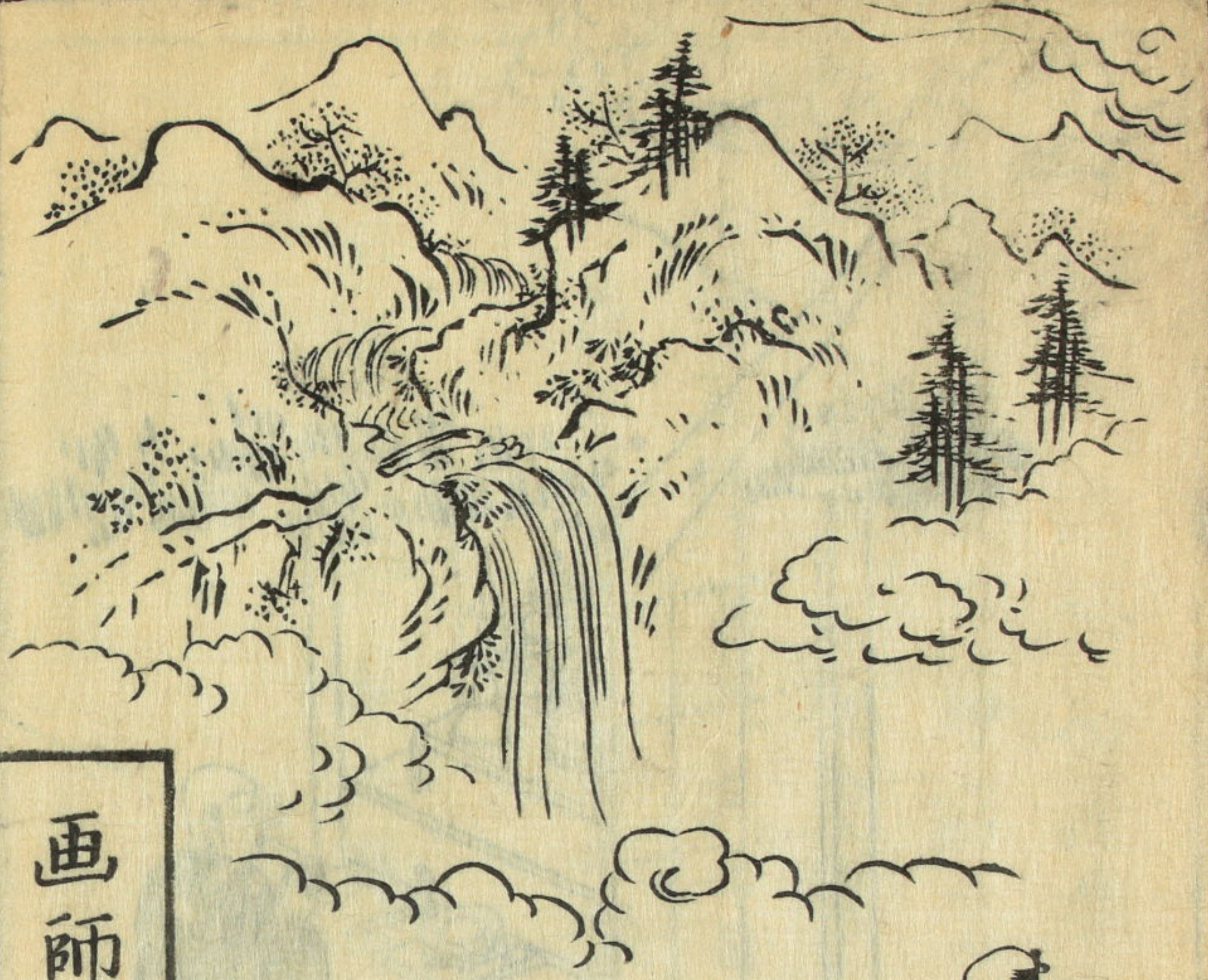
昔享保八卯年九月十四日

奥州伊達郡南平田村

行年二十二歳

直往敬白





画師 林丹治



閱孝感冥祥錄偈 有引畧之

奧陽柔折臨濟正宗沙門定龍活雲稿

希有	往	行	者	身	貪	志	不	貪
深信	宜	感	佛	至	孝	得	通	神
蓮	判	面	遊	歷	鐵	戒	苦	照
地	藏	悲	願	力	其	德	實	難
聞	見	絕	疑	惑	讚	勸	誘	久
共	生	欣	厭	意	同	會	審	他
					濱			

はやくたのめ慈みの淨法
 ほとけのまよふらんをみし
 こゝろある御慈をまうすそ
 りやくうする死法をれハ
 るの日累歎かこたはに
 わが身ごと死乃飛命を
 よにあえたてしゆちるひ
 ねんげ乃るふは化生しそ

にぞ乃留れ迷ひ子を
 へし得るさうひの遠をれど
 ちうくおむさき縁ふあり
 ぬるまよふ心法まにうけ
 を死ふし立格は願む
 かの法救ひこらんそ
 たのめをまぐに後のせハ
 するのま無生れ理を悟り

つ孫よ見佛の法一
 ながく不返乃位をえ
 む志を善持よそ願
 わはまの石に生ても
 たそれおのき愛悩をて
 やよよくあつみおとに
 けうにかしこれるをさ
 このたひ生死を離れすハ

ぬんて佛及増進を
 らくはまあへく五清く
 うわ乃すくはあれ
 のどひさいま縁もほし
 くも一帯にふせまも
 ままに得るまを交て
 へんまあたなる縁よあ
 ねんまのつねりつをそ

ていもをををを
さだめあき世の世
ゆめとたうはゆめ
みはくろをたき
あきたまををを
もろ日暮れ旅のそ
すから世に生れな

あすをねたを
まのよを一人
めよんを
しはにを今より
ひよ修行の功を
せのねもいそげ
系九を乃花の甚

南無阿彌陀佛

浄土の家門いら
もや又百年も
念佛流をとい
救護ともげ
はくもひゆく
先帝とふと

園光大師の
郡のつま
西と祢が
ひみく月目
業乃神の
ふうき

武蔵守

三十一

かく不流流のよふかた
 海徳佛起せの本形紙
 守一尊能学運名
 宗も地養そん
 本の抄りりもほされ
 上ふまきやゝるの巻より
 乙川郡治谷郷
 二七の巻よりたのづ
 つわふえ禄十二年

ち及乎縁とつりしにて
 奥野二別よ弘通せし
 傳て中地とすけりまば
 吾佛を界夜宗生乃
 かの抄る乃九巻
 たる利生ハみられらぬ
 夫吹氏の子と生
 佛の道よ帰入して
 十七巻の末乃

同必修を大安の
 良覚上人師とたの
 浄土の章疏を習学し
 西条にむかふかたの巻
 二十あまられ六ツ乃
 巻の夜乃いろそく
 うろよむまぶ巻の巻
 目よつまむとい縁にて
 いろりかハは乃園也

宗義ふのぶしこのち乃
 利發深衣乃巻とありて
 巻くの叢林終流んく
 らく名利といひて
 流せ紙のれ山伝巻
 まあふのるも流しぬ
 流乃命とわしきひん
 たまけりやあまむや
 なるのちもすすし

如法に課する珠粒の玉
遠くへすまぬ自他の
きくひるや四方ふる
化依の横隊も熟して
志げふ言座のうへふ
海にのちのちと現れ
農民樵夫漁父獵師
横に志さく人ふ法の声
日課を佛とうくら若

十萬余の救たれや
つれどせよと志く玉の
徳よならそといはく
法よ赴く法りの場
何れに佛ありおと化し
勅記の詞に極やうり
老年少児のそひも
きてうらみはつたも
十七萬はたふたふた

改依の男女の信水
何れに盲の目を
ありは雲と感
すれを排遣の若
佛法の護の法
邪見を除ん
かつるを縁
信の芽
かひをそ

うは佛の威
又ハ邪為性
まことハ佛性
忽ち罰と
疑遣のつ
折伏の益
かく利
大慈悲
利益よ

ことしは紅梅もほろろふ
 ひごらののふ合場氣して
 水と梅と西は向き
 この病中よかづくの
 つわふ心もくれ作乃
 ろろひ之十七歳若
 源禪定より入系ごく
 とん息つささせあふ時
 彩よ妙なる樂の喜

享保三年秋の暮
 寒年の序は雪が降りて
 隙縫の儀は入りたまふ
 猪境瑞雲いちぢきし
 松よともなふ喜もまき
 西月二日のあけぼのふ
 雪がらの声くわえたまふ
 いりりれ之夜を影初し
 是そ大か感物也

多よりあひしけ生れ
 化よあけりしををの
 霧の林の秋も若月
 かへやとおりのあはさして
 さくも滅後ののる夜もふ
 りねや梅系上品の
 蓮華三昧密経お
 不可思議なり利益六
 閑維は座よりいろくの

大形滅物の瑞きり
 河原の悲歌はあきやこの
 雪がくれあしむくとも
 何道と今ふつらうも
 松野氏が愛し入り
 地蔵ありよのそん若ハ
 源秘の伝は若合して
 六とせと色く改革乃
 舍利と現しを程うふ

所紀の伝とぞ増ふる
 廣の書砂の切すくま
 筆の梅しうのそま
 師の一代の化跡をバ
 舟と奏特乃教のそま
 多しといふる縁ゆにそ
 高師の化夜まあゆそ
 本地上品地秀る
 日課念佛同行人
 南無阿彌陀佛

そのあくのめんとうる
 現乃海をにくはく
 しらふまきうれは法乃
 實例所撰の行業記
 くりくこれといはせり
 かな折しも生まわひ
 生死と無縁とらあはよ
 當迹日域学道師
 師慈成たまうあうさん
 祖開不能上人速作

ちし阿しけちわいあ流とせよおれ學
 ちし天地をも動し鬼神也も感せむ
 當物徳のくさくあ流の中にもさう孝保
 乃頃ちこれ國忠直性の事蹟も佛の
 おし乃ことわりを志しん人かいと
 阿しくもしたるにさう思あめ
 おしちうるまを解りさるをいえ
 臨する人ふれらき州姓うきたるゆに
 阿してあくきのあとましうに志る

の一家を孝感冥祥録てふこいさきに持
 にありて盡く流布し傳ふる人の知ら
 不たりあるの家小今世感得借し辭かき
 乃所こ小生ありさまを繕のりるふく故
 阿や一のほ志れ申より求いふたなりを
 のくてもしも捨おのとも靈魚てふ事乃すこ
 かしもあり奈んといはおしすこお流の
 なるまうりて女なると孫つのみまふらり
 毛し乃ゆかちもしらすんまの世者

様を見て釋古如いこ浄土を教ふれたつ起
 ことなりあやハ又素拍の大徳乃がこき
 こあこハ行業記まき事てふ故にありて世よ
 してまやすめきハ孫のふらて小おに命起
 小もあら孫と此大徳乃おりせし世に直進
 乃希有なるためしをめてゆてこく良人
 故物ありしものへ直進を孫に傳へく
 帰依しなれり又家寺に順受上人ハ
 此大徳の徳故志のいありし乃流のり

一久世を去りあいてはこをうごちの
 國より此武藏野に高祿城後一をこ
 給いていと福む一海小志城をこいあき
 八おほくなくさくすくすくにつくたなり侍るもお海
 治けは縁よへ何ささるくしはまのり業記
 乃中をり地々のあまをさうてく梓より
 ための感得傳とことし小舟に坑布せしめんと
 ほりす家もある也一は阿まいたるを
 了明二寅はあ厭飲沙門補陀蓮接落にさる

華頂山御藏版目錄

圓光大師繪詞傳

四十八卷
合本二十四冊

黒谷語燈録

七冊

同行狀翼讚

二十卷同上人傳

十冊

同秘傳鈔

三冊漢語燈録

七冊

同略頌

近刻和語燈録

七冊

三部經

義山清濁
中形兩面摺

五部九卷

義山清濁

九冊

同大形

同
四卷十七卷

同

善導記
良忠記

見聞附
右御疏通上云

二十三冊

同科圖經

同

四冊同要文

義山清濁

一冊

同合讚

七冊往生論註

同

三冊

選擇集

義山清濁

二冊七卷書箝

再板

七冊

同 濁附

惠空点

二冊 安樂集

義山清濁

二冊

同 决疑鈔

頭書

五冊 往生禮讚纂釋

五冊

同 微考

三冊 鎮西宗要

五冊

淨土名目圖見聞

頭書再板

三冊 同聽書

二冊

宗略大要義

關通和尚述

一冊 淨業課誦

附錄

二冊

念佛名義集

一冊 梵本三經

心經 彌陀 普賢

一冊

皇都書林麗澤堂藏版標目錄

譯文筌蹄

徂徠先生述

全部六冊

當麻曼茶羅圖

此書ハ譯文字字儀返對ニクハレク
漢字ヲ片假名ニ解セシモノナリ

同 圖本

一冊

同 後編

同著

三冊

同 搜玄疏

勢州洞津天竺寺
大順和尚述

七冊

同 字引

筌蹄ノ文字ヲアツメ
字引ナリ

古ヨリ曼茶羅ニ疑レキヲ深リ改メ諸尊ノ圖
印衣服ニテクハレク正シアラタメシモノナリ

同 拾遺

近刻

同 述將記

義山上人述

四冊

虛字解

皆川先生述

二冊

同 綱要

無外文雄述

二冊

同 續編

同

二冊

同 大經開檀記

大順和尚述

四冊

譯文須知

愚山先生述

六冊

同 智光清海善導

各二冊宛

譯文ノ虚字ヲイロハワケニ
シテアツメタル書ナリ

同 反古和讚

喚譽二人述
中將姫代ニ和サシタル

二冊

文語解

大典釋師述 五冊
文字義音便ヲ解シテ示ス

同 禮誦法

おぼしめし書卷
供養儀式決法也 一卷

護法資治論

不染居士述 五冊
神儒佛三教之弊ヲ説ク

三部假名抄

白阿上人述 三冊

同 後編

大典釋師述 五冊
前ニモレテ集メタモノ

本朝諸佛靈應記

此書の如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外

同 要解

かゝる如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外

念佛無上醍醐篇

尾州八事山
諦忍律師述 三冊

同 諺註

法小報恩湯次上人述 七冊

五味ノ中念佛ヲ醍醐味ニトテ五佛即弥陀
弥陀即五佛等ヲテ蜜教ヲ引テ述ビ書ナリ

同 祕要藏

同 一冊
粗前偏ニテナリ

同 言釋

かゝる如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外
傳の如くかゝる如く外

十樂手鏡

同 二冊

浄土ノ十樂ヲ和解シテ示スレクノ且
十樂ニ對シテ人間ノ十苦ヲノベシナリ

無能和尚行業記

柳谷宗隆述 二冊
一代のり状と云へるま

弘法大師 念佛法語直解

同 一冊

同 遺事

一代記よりんをあげむ
以外、いろは和漢有

高野大師明遍僧都校與ノ法
語ヲ直解シテタル書ナリ

奥羽念佛驗記

在修和尚述 三冊

施餓鬼問辨

同 一冊
ヒカキ功德并行喜ヲ示ス

圓頓戒誘蒙

水戸觀微述 一冊

律苑行事問辨

同 一冊
律宗行事作法ヲ示ス

梵網經要解

同 六冊
片カテ真名ヲ經中ニ多ク註

同 和解

仙の洞室述 三冊
誘蒙と云へる如く解

日本最勝念佛法語註

同 一冊
又聖德太子念佛法語ト云

方服圖儀

意を和尚述 二冊

博士學哥念佛ヲ疑ス皇太子法語ヲ以テ示ス
學哥忽念佛ニ歸スルヲ和解シテ通俗ヲサトス

涅槃隨文略讚

法小報恩湯次上人述 三冊

善導和尚行狀記

同 二冊

念佛奇特現證集

法小報恩湯次上人述 二冊

一拔起諸諸說辨斷

同 一冊
并善光寺如來緣起

空華隨筆

同 二冊
律師一代心ニウカミシ要ヲ集ム

淨宗護國篇

切つかを 四冊

同 談叢

同 四冊
律師見聞覺知ヲ撰筆ス

淨宗護國篇

切つかを 四冊

四十八願題詠抄

浪華大福寺風航述 五冊
四十八願舌哥ヲ註解シタル

法の道志るべ

慈空和上述 一冊

別時念佛法活法注

忍徹上人述 一冊

別時の功徳不了思儀カクモクモ
アゲルキニキル

浄土要略抄

向阿上人述 二冊
要文と略解ノミナリ

往生至要略解

同
此ノ外ニ別ノ
和儀ナリ

勸化和讃

二冊

元祖大師教述カキテ
浄土妻心ニテカキテ

關通和尚行業記

二冊

熊谷蓮生行狀記

カクカウテ 八冊
一代ノ事ヲカキテ

同代繪抄

右ノ行状カキテ
カキテ

九想詩諺解

東祖上人カキテ
カキテ

同 繪抄

右ノカキテ
カキテ

浄土源流章

一冊

浄土所依ノ経論并
鎮西西山ノ兩派一念
多念ノ二義亦宗意ノ
立様ヲカキテ

識知浄土論

一冊

諷誦啓蒙

三冊

蓮門ノ諷誦并引導下語等ヲ
アツメタル書ナリ

傳戒論

沙門了譽述 一冊

念佛安心大要抄

一冊
安心ノ要ヲカキテ

圓光大師 廿五箇所案内記

小本二冊
此ノ外ニ別ノ
和儀ナリ

大我和尚述 夢庵戲教集

二冊

唯稱安心鏡

蓮門安心の歌を
カキテ

念佛神力傳

尾及八事ノ神異ヲ
カキテ

古 彈誓上人繪詞傳

同 校定
一冊

同翼讚

同 同
一冊

厭求上人行狀記

同 同
一冊

以八上人行狀記

同 同
一冊

同 補註私記

沙門紀南全長述 二冊
右ノ事ヲ細述スル

勸修念佛記

淨國公ノ御伽カキテ
カキテ

同 稱讚浄土經

三冊

專修安心鏡

浄土の安心カキテ
カキテ

忍辱守隨筆

濃勢赤坂愚菴述 二冊
心ニ思ヒ出セテ

陰騭文流疏

一冊

問澄和尚行狀記

一冊

本朝新因緣集

極惡苦報迅速カキテ
五冊

一休 狂歌問答

一冊

鎮觀用心講抄

一冊

念佛安心

厭求上人述

一冊

口稱百萬遍聲記

一冊

一言法談

同

一冊

淨土十要

五冊

同頭書

報恩寺湛澄上人述

三冊

念佛選推評

新刻

一冊

同句解

註釈志る書なり

四冊

忍徵勝瑞記

一冊

空也上人繪詞傳

同

三冊

伊豆弥陀穴之記

一冊

十王讚嘆修善抄

隆堯上人述

臨終用心

一冊

諸宗捷徑 佛法簡要錄

諸佛宗徒の要約の言佛法傳を撰す代の相目法宗并を介する書也

同節用

臨終の心方々といふ子孫令て心安ん書二冊

諫母艸

大母夫人二進書なり

同 善道大師 用心抄

一冊

法岸和尚行業記

全部二冊

元亨釋書和解

二十三冊

圓光大師前知錄

金剛寶戒章

三冊

系光大師 四八箇所 梅一行巡拜記

全部一冊

賢問子行状

全部五冊

此書は大師の遺徳の事と云ふ事を知るに最も 圓光大師前知錄

同 誓願寺縁記

同 二冊

此書は大師の遺徳の事と云ふ事を知るに最も 圓光大師前知錄

同 眞俗佛事編

同 六冊

此書は大師の遺徳の事と云ふ事を知るに最も 圓光大師前知錄

同 眞俗佛事編

同 六冊

同 盡孝説

全部二冊

同 眞俗佛事編

同 六冊

此書は大師の遺徳の事と云ふ事を知るに最も 圓光大師前知錄

同 眞俗佛事編

同 六冊

吉水遺哲語論附録

全部一冊

閑窓雜錄

評忍律師述 全部一冊

此書は大師の遺徳の事と云ふ事を知るに最も 圓光大師前知錄

比丘尼戒本

同 一冊

稱名感應記

全部二冊

淨土十勝論

同 十八冊

此書は大師の遺徳の事と云ふ事を知るに最も 圓光大師前知錄

十王讚嘆抄

同 二冊

緇白性生傳

全部二冊

此書ハ初書より百ヶ日と云ふの結語の事と
ありたりらんのもけり

此書ハ向河上人稱会上人以八上人隨意は系
彈誓上人外上人等の性生傳とあるを
圓通和尚述

彼岸辨疑

全部二冊

此書ハ二書のむづかしのけり

和字選釋集

此書ハ二書のむづかしのけり

勸化本義

同二冊

靈魂得脱物語

同二冊

女人性生章

同一冊

此書ハ性生章のころ多師に性生何事
生あるをいふ事とまゝいふは性生
せり

善惡因果經和訓

同一冊

勸化
和漢二國性生傳

同三冊

此書ハ經文と云ふらんして老若男女
ともよきなりやとあるをいふ

此書ハ和漢二國性生傳の性生傳と云ふ
なりとあるをいふ

勸化故事因縁集

同三冊

此書ハ佛傳神のころとあるをいふ

此書ハ宣徳侯よりして性生のころと
ありとあるをいふ

大我和尚述
鼎足論

同三冊

聖徳太子傳圖繪

全部六冊

此書ハ佛傳神のころとあるをいふ

淨土 日用念誦

折經 二卷

二十五菩薩之圖 大小

一冊

六時禮讚

義山清濁

一卷

授菩薩戒要解

妙樂大師述

一冊

佛名會式

一卷

七十五法名目冠註

此書ハ有宗七十五法ノ名
目ノ抄集と書く 三冊

圓光 和讚

一卷

起信義記

三冊

四箇法用

又ハ大原声明ト云

同幻虎錄

并辨議

各五冊宛

日設禮讚偈

獅谷忍微和尚述 一卷

一技起請諺論

一冊

往生要集

ひりかな画入 三冊

御傳縁起目錄

二冊

執持名號勤行式

片かなひりかなと云く一卷

選譯集決疑抄會本

忍微述

五冊

太上感應應篇

折本

各一冊宛

忍微上人行業記

二冊

引聲彌陀經

折經

一卷

大乘義章

華嚴探玄記

念佛進善說

一冊

同發揮抄并五教次第

發菩提心集ひろか

三冊

五教章冠註

一切經惠林音義

同復古記

高野大師行狀記

同衡秘抄

淨土群疑論

同函真抄

文鏡秘府論

俱舍論冠註

同疏第二重
第三重

悉曇云二蜜抄

諸秘釋

右之外書物徑師類下並抄上云以御用紙付下云偽書希并京本賣買佐云

御書物所 京洛東知恩院古門前石橋町

澤田吉左衛門

